

物語の真の主人公

辻 憲男（文学部教授）

由良に来てから、二人は初めて一緒に歩いた。直訴して、山へ柴刈りに登るのである。厨子王は姉の心をはかりかねて、寂しいような、悲しいような思いに胸がいっぱいになっている。「姉さん。あなたはわたしに隠して、何か考えていますね。なぜそれをわたしに言って聞かせてくれないのです」。安寿は今年十五になる。今朝も毫光のさすような喜を額にたたえて、大きい目を赫（かがや）かしている。しかし弟の詞には答えない。ただ引き合っている手に力を入れただけである。…岩間に咲いた小さいスマレを指さして言った。「御覧。もう春になるのね」。厨子王は黙ってうなずいた。

1915年、森鷗外の「山椒大夫」。逃亡の企てを知られ、烙印を押される悪夢を二人同時に見た。覚めてお守りを拝むと、奇跡かや、地藏尊の額に十文字の傷がついていた。それから安寿の様子がひどく変わった。引きしまった表情に、遙か遠くを見つめるような目、そして物を言わなくなった。

…山の頂に来て、安寿は打ち明けた。これから一人京をめざし、善い人にめぐり逢って、父や母の消息を尋ねてほしい、「お前一人でする事を、わたしと一緒にするつもりでしておくれ」。厨子王はその言に従い、国分寺に駆け込んだ。清水寺に参り、守り本尊の御利益で運が開けた。安寿の運命は、原拠の説経『さんせう大夫』ではもっと悲しく残酷である。鷗外はそれを避け、恨みや憎しみを書かなかった。だが自己犠牲を美化するのではなく、少女の聡く賢い智恵をもって、何ものにも負けぬ強い生き方を示した。一蓮托生を確信した安寿こそが、まさしく物語の真の主人公であった。

-連載了-



由良川河口の西、安寿が汐を汲んだという浜辺。京都府宮津市。